

旧校舎の一階の古びたドアを開けると、そこは準備室とは名ばかりの物置スペースだった。所狭しと並べられた古いロッカーや模造紙や本の一角に一对のデスクと椅子があり、例の男はそこに座したまま、少年に優しい目で笑いかけた。年の頃は三十くらいだろうか—白いシャツに爽やかな青色のネクタイを締めている。

「やあ、よく来たね」

新校舎を挟んだ向こう側の校庭ではしゃぐ生徒たちの声が、うっすらと聞こえてくる。今は昼休みだ。こんな薄暗い、埃を被ったような場所に今いるのは少年とこの男—少年の担任教師—くらいのものだろう。  
男は言う。

「ちゃんとやったとおりの格好で来たね。えらいよ」

少年は体操服を着ていた。半袖半ズボンからのぞくか細い四肢は玉のように白く、髪や瞳の黒とのコントラストが美しい。  
男は立ち上がりおもむろに入り口のドアを締めると、がちゃりと内側から鍵をかけてしまった。

その小さな肩をそっと押し、男は少年を奥へと誘(いざな)った。

「君はその格好がいちばんよく似合うよ」

少年は先程からじっと俯いたままだ。  
時折戸惑った様子で担任教師を見上げるが、目が合えば慌ててそっぽを向く。

「もっと可愛い格好にしてあげるからね」

男はデスクの上に置いてあったゴム製の縄跳び具を手に掴む。

「はい、手は背中のお尻でこう、ね」

後ろ向きにさせた少年を、男はあっという間に後ろ手に縛(いまし)めてしまった。少年は抵抗する素振も見せず、不安そうな表情を浮かべながらも大人しく床を見つめている。

縄跳びの紐とはいえ、案外がっちり固定されるものだ。ぴくりとも動かせなくなった両腕に、少年の中に緊張が走る。

その状態で軀を抱え上げられ、座した男の膝上に対面で座らされる。古びた椅子の金属部分がきい、と小さく軋んだ。

男との体格差により、少年はかなり脚を開いていなければならなかった。股間の中心が、意図せず男のそれと服越しにはあるが密着する。

男はわざとらしく少年の腰を引きよせると、ぐい、とよりその部分が密着するよう促した。

「んう……、」

布越しに男の温度を感じ、少年は思わず声を漏らしてしまう。そこは心なしか腰を触っている手よりも温度が高い気がする。

男は何度も撫でさするように少年の腰を触っては、時折ぐい、と引き寄せる。その度に脚の間のもが男のそれと服越しに何度も擦り合わされて、次第に妙な熱を持ち始める。

「う……、あ……、」

気づけば少年の息はすっかり乱れていた。濡れた赤い唇からはかすかに声も漏れ始める。

こうして休み時間に二人で会うようになってから、もうどのくらいになるだろうか。どの生徒にも優しく明るい担任教師が裏でこんなことをやっているなんて、誰も想像できないに違いない。

だいぶ前に、少年は校舎の隅で一人本を読んでいた。たまたま通りかかった担任教師に、もっと面白い本があるから来ないかと誘われここへ来たのが始まりだった。君にだけこっそり見せるから、他の人には内緒で来るんだよ、そう男は言った。嬉しかった。みんなに慕われている人気者の先生に、自分は特別に思われている一。特別親しい友人のいない少年の胸の内を、その思いは確かに満たした。

少年が胸をときめかせて旧校舎の扉をくぐった先に、確かに面白い本を持った男はいた。けれどその後別のことまで教え込まれるなんて、予想もしていなかった。

その場で読書に夢中になりはじめた少年に男はそっと口づける。戸惑う少年の耳元で、怖くないから、と囁き、細い腰を抱き寄せ、服の下から脇腹に手を這わせ一。

その日から二人の関係は続いていた。

「あ…っ、あ……っつ、」

何度も股間を男に擦り寄せるように腰を抱かれ、少年のそこはすっかり熱を帯びていた。服を挟んで向こう側の男のものも、心なしか質量を増しているように思える。

「声出しちゃって、かわいいね」

男は少年の艶やかな髪を撫でる。両腕を拘束されたあげくにこんなことをされて、酷いことをされているのはわかっている。しかし、少年は心の底ではどうしてもこの男を憎めずにいる。こんなことはこの男にすら言えないが、好きな先生が自分にだけ特別なことをしてくれるのが、やはりどうしようもなく嬉しい。

男は少年の髪を撫でていた手を細い首筋、華奢な肩に滑らせ、軀の輪郭を確かめるように撫でさする。やがて肩を抱きその親指を服の上から少年の片胸へ伸ばした。ぐり、とやや強めの力で平らかなそこを圧(お)してみる。

「あ……っ、」

びくりと少年の肩が跳ねた。指の下であっという間に硬くなる胸の頂きの感覚を男は愉(たの)しんだ。

少年の可愛らしい人形のような顔は、すっかり紅く色づいていた。瞳は欲に濡れ、ほそい肩を上下させるほど息は荒くなり始めている。

「あ……っ！ ああ……っ！」

男は更に芯を持った片胸を苛(いじ)めはじめ。ぐり、ぐり、と何度も強めに圧してみたり、圧したまま円を描くように捏ねて甚振(いたぶ)ったり一。

「うあ……っ、や……っっ」

その度に少年の軀は面白い程に跳ね、男を悦ばせた。  
とうとう男は両方の胸を体操服越しに弄(いじ)りはじめる。

「あああ……っっ！だ…、だ、め……っ、」

少年の黒々とした瞳に潤いが満ちていく。男に胸を弄られる度、肩だけでなく今度は腰がびくつきはじめ。男と密着した股間に、何故だか妙な刺激が降りてきてかなわない。

「いやらしいな。腰、揺れてるよ？」

男に指摘され、既に紅潮した顔が余計に熱くなる。  
気づけば男の股間に自らのものを押し付けるようにして、少年は下半身を揺らめかせていた。

「う……っ、うう…っ、ちが…っ、」

「何が違うのかな？ さわって確かめてみなくっちゃな」

綺麗な顔で男は笑う。いたずらっぽく濡れた目を覗き込まれ、少年はまた羞恥で顔の温度が上がるのを感じた。

男は体操服の裾を容赦なくまくりあげると、その端を口で咥えておくよう少年に指示する。唾液に溢れた口でなんとかそれを咥えると、下着を身に着けていない、痩せた胴体が剥き出しになる。

下ははしたない程に脚を広げさせられ、股間は先生と密着した状態で後ろ手に縄跳び具で縛られ、敏感に感じきった乳首を晒すように服の裾を口で上げている—その恰好は存分に少年の恥辱を煽った。にもかかわらず、やはりこの男のことを嫌いになれないのは

何故だろう。少年は妙な疼きに支配され始めた思考の片隅でそう考えた。

「何か考えてるね？」

「……んんっ！！……っっ？！」

唐突に両方の花芽を直(じか)に触られ、少年の瘦身が跳ねる。男に弄られれば弄られるほど、そこは紅く色づいていく。男は屈(かが)みこみ、硬くなった片胸にべろりと舌を這わせた。

「ひ…っっ！あ」

かなわず背を仰け反らせる少年の目から反射的に涙が零れ落ちる。

「んん？気持ちよすぎて泣いちゃったか～。って、もう、服の端噛んでなきやだめじゃないか」

男は少年に再度服の裾を噛ませると、容赦なく紅くなったそこを弄(もてあそ)びはじめる。硬くしこったそこを触れるか触れないかの具合で掠(かす)めたかと思うと急にぐり！と押し潰したり、そのままやわやわと捏ねまわしたりした。

「んん”っ！う”…、んん”んーっっ！！ん”ん”ん…っう、」

服を啜えさせられたまま、少年は胸の刺激に耐えた。胸の頂きを苛められるたびに痺れたような感覚が脇腹や内臓を這い、やがて脚の間の一点に集中していく。男の膝の上で小さな躰は魚のようにのたうった。

「感じやすいね」

男は微笑みながら、今までの中でいちばん強い力で両の花芽をつねりあげた。

「ひッ……っつ、ん”ん”ん”んんんん！！！！！！！！」

電流のような刺激が胸と脚の間に痺れ落ちる。刺激は火のように少年の内側を焼いた。服を啜えたまま、少年は声にならない声をあげぼろぼろと泣いた。

「すごいね。下ももう、こんなになってるじゃん」

男の膝の上でびくん、びくんと痙攣している少年に構わず、男は少年の脚の間に手を伸ばす。体操服の上からそっと触って形を確かめれば、そこは幼いながらも確かな熱と芯を持っている。

「なんで、こんなになっちゃってるのかな？」

先端に近いほうを服の上からくり、くり、と揉まれれば、先程までとはまた違う感覚が少年を襲う。本当はさっきからずっと、ここを触ってほしくて堪らなかった。

「あ……っ！うあ……っつ、」

先程与えられた刺激も相まって、少年は耐えられず腰を大きく揺らしてしまう。

「ふふ、いいよ。触ってあげる。ズボン脱がせてあげよう」

男の声にもさすがに興奮の色が混ざりはじめる。手早く少年のズボンを取り去ると、少年の白い大腿部と下に身に着けていたものが露(あら)わになる。

「君、ほんとにいい子だね。先生の言いつけ守って、ちゃんと穿いてきてくれたんだね」

「……っつ、」